

世界100人の物語全集

私はこんな人になりたい

集英社版 日本子どもを守る会 編



《1》愛に生きる物語

野口英世 ゴッホ キュリー夫人 渡辺崋山 シューマン
モーツァルト 高村光太郎 シーボルト



世界100人の物語全集

はこんな人になりたい

子どもを守る会・編

集英社

《1》愛に生きる物語

- ・ アブラハム・ダービー
- ・ アンデルセン
- ・ アンリ・デュナン
- ・ 石川倉次
- ・ 石原幸一
- ・ 井上でん
- ・ 内村鑑三
- ・ 瓜生岩子
- ・ エジソン
- ・ エンクルマ
- ・ 大庭源之丞
- ・ 大原幽学
- ・ 岡倉天心
- ・ 小川正子
- ・ 尾崎行雄
- ・ 柿右衛門
- ・ ガガーリン
- ・ 勝 海舟
- ・ 葛飾北斎
- ・ ガリレオ
- ・ 河上 肇
- ・ ガンジー
- ・ 北里柴三郎
- ・ 木原 均
- キュリー夫人
- ・ 金原明善
- ・ クーベルタン
- ・ 屈 原
- ・ 古賀忠道
- ・ コッホ
- ゴッホ
- ・ コロンブス

- ・ 坂本竜馬
- ・ シートン
- シーボルト
- ・ ジェンナー
- ・ ジェーン・アダムズ
- シューマン
- ・ シュバイツァー
- ・ ジョセフィン・ベーカー
- ・ 白瀬 矗
- ・ 神八三郎
- ・ スコット
- ・ ストー夫人
- ・ 禅 海
- ・ 曾田嘉伊智
- ・ ゴ ラ
- ・ 孫 文
- ・ 高野長英
- 高村光太郎
- ・ 滝廉太郎
- ・ タゴール
- ・ 田中正造
- ・ 玉川庄右衛門
- ・ 玉川清右衛門
- ・ ツオルコフスキー
- ・ 津田梅子
- ・ デイズニー
- ・ 豊田佐吉
- ・ トルストイ
- ・ ナイチンゲール
- ・ 中西悟堂
- ・ 並河成資
- ・ ニエーブス

- ・ 二宮金次郎
- ・ ネルー
- 野口英世
- ・ 野口幽香
- ・ ハーゲンベック
- ・ パートランド・ラッセル
- ・ 橋本五郎右衛門
- ・ 平賀源内
- ・ 平塚らいてう
- ・ ファーブル
- ・ フォード
- ・ 福沢諭吉
- ・ ベートーベン
- ・ ベーブルース
- ・ ペスタロッツ
- ・ ホセ・リザール
- ・ 植有恒
- ・ 牧野富太郎
- ・ 松木莊左衛門
- ・ 宮沢賢治
- モーツァルト
- ・ 本木昌造
- ・ ユーゴー
- ・ ライト兄弟
- ・ リビングストン
- ・ 良 寛
- ・ リンカーン
- ・ ロダン
- ・ ロバート・オーエン
- ・ ロマン・ロラン
- ・ ワシントン
- 渡辺華山

世界100人の物語全集

私はこんな人になりたい

会との申合
せにより検印
を省略します

NDC 280
集英社・昭和38年
P260 22cm

第1巻 愛に生きる物語

昭和三十八年五月十日 印刷
昭和三十八年五月二十日 発行

編 日本子どもを守る会

発行者 陶山 巖

印刷者 大橋 貞雄

印刷所 共同印刷株式会社

製本所 石毛製本所

本文用紙 大昭和製紙株式会社特漉

発行所

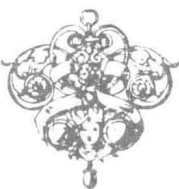
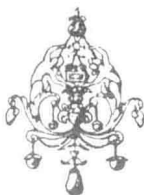
株式会社 集英社

東京都千代田区神田一ツ橋二一三
電話大代表(30)三〇一 振替東京一五六三

定価三九〇円

はじめのことは

自然界にさまざまな美しい花がさくように、人間の世界にも、さまざまな美しい花が



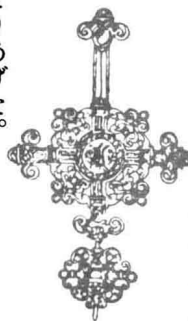
さく。愛は、その花ばなの中でも、とくに美しい花である。愛のない家庭、愛のない世の中というものを、



わたしたちは考えることができない。愛はわたしたちが生きていくための、たいせつな心の栄養分なのだ。



この巻では、その愛のうちで、とくに、身ぢかな人びとのあいだの愛、つまり、親子、兄弟、師弟、友人の



あいだに美しく花咲いた愛のかたちをとりあげた。

もくじ

世界100人の物語全集

《1》愛に生きる物語



那須辰造

愛あいを信しんじて

母と小林先生にみちびかれた

野口英世

かたわな手……………11

いいおかあさん……………17

ごうじょうな子……………25

思いがけないことば……………31

苦しい年月……………36

動いた指……………43

旅立ち……………49

野口英世……………55

世界的な学者になつて……………61

この物語を読むまえに……………9

野口英世の小伝……………10

スクロドフスキー家の姉妹

卒業式の日…… 87
金メダルはもらったけれど…… 90

山本藤枝



にいさん、
いい絵をかいて
兄ゴッホのためにつくした
テオドル・ゴッホ

せつかなにいさん…… 67
ふしぎな気持ち…… 68
売れない絵…… 71
くるったヴァインセント…… 74
サン・レミにて…… 76
赤ちゃんの名まえ…… 78
二度とさめないねむり…… 80
この物語を読むまえに…… 65
ヴァインセント・ヴァン・ゴッホの小伝…… 66



富永次郎

父と苦学くがくの姉あねをたすけた
わかい日のキュリー夫人ふじん

たのしい一年間…… 94

ある方法…… 98

ひとりぼっち…… 104

はだしの子どもたち…… 108

しんぼう強く…… 116

父とむすめ…… 118

クラコー区六十六番地…… 123

パリへ…… 126

この物語ものがたりを読むまえに…… 85

マリー・キュリーの小説しょうせつ…… 86



強くつよ生きぬいた母

母への願い…… 131

くやしかったその日…… 132

母への感謝…… 135

雪の日の別れ…… 139

渡辺わたなべ崙山かざんとその母

春の交響曲

クララ・シューマンと
ロバート・シューマンの夫婦愛



正しい政治を……………	140
蘭学者の集まり……………	144
おそろしいゆめ……………	148
母をよぶ声……………	150
絵筆に生命をうちこんで……………	154
明るい未来をゆめみて……………	156
この物語を読むまえに……………	129
渡辺崋山の小伝……………	130
少女の日に……………	161
いためた指……………	166
新しい生活……………	172
春の交響曲……………	177
悲しい別れ……………	181
この物語を読むまえに……………	159
シューマン夫妻の小伝……………	160

山主敏子

なかよしきょうだい

モーツアルトとその姉



ピアノの子もりうた…… 187

岡上鈴江

女王さまの前で…… 190

大すきなわが家、やさしい姉…… 194

この物語を読むまえに…… 185

ヴォルフガング・アマデウス・モーツアルトの小伝…… 186



永遠に生きる妻

高村光太郎と智恵子の物語

しずかなアトリエ…… 201

生まれつきの彫刻家…… 204

たのしい生活…… 211

地上のモナ・リザ…… 214

かわい地上の花…… 218

ころがっていたすいみん薬…… 220

山本和夫

ばけもの屋敷……223

美しい切りぬき絵……225

永遠に生きる智恵子……228

この物語を読むまえに……199

高村光太郎・智恵子の小伝……200



友情……233

羽仁説子

友愛の人

江戸へ大名行列……241

シーボルト事件……245

著書「日本」……248

あとにのこされたおいね……249

この物語を読むまえに……231

フイーリップ・フォン・シーボルトの小伝……232

シーボルトとそのでしたち

文中の☆は、本文の重要なところを写真図版でしめしている。

はじめのことば……………1

写真口絵

あとがき……………253

作家紹介……………260

装丁

A D Ⅱ 沢田重隆・D Ⅱ 鈴木康行

愛を信じて

母と小林先生にみちびかれた野口英世

清作は、生まれてまもなく左手に大やけどをして、かたわになつた。五本の指がくつついて、まるたんぼうのようになり、みんなから「てんぼう」といわれ、ばかにされた。そのうえ家が、ひどくまずしかった。

この清作少年に、母の愛と、小林先生夫妻の愛、その他の人びとのあたたかい愛がそがれた。もし、これらの愛情がなかったら、のちの日の世界的医学者、野口英世は、生まれていなかったかもしれない。

清作少年は、びんぼうにも不幸にもまけず努力し、りっぱな学者となつた。

この一篇は、人類のためにつくし、のちの世の人びとから、したわれ尊敬された偉大な学者の、少年時代にそがれた、それら美しい愛の物語である。

作・那須辰造

さしえ・三芳悌吉

野口英世の小学

野口英世は、一八七六年（明治九年）、福島県の猪苗代湖畔の翁島村の、まづしい農家に生まれた。三才のとき、大やけどをして左手がかわになった。そのため、苦しみつづけたが、小林栄先生にみとめられて高等小学校にすすみ、先生のすすめで左手の手術をうけ、指が動くようになった。

高等小学校をでてから、病院の書生となり医学を勉強し、独学で開業

医試験に合格した。それから、北里伝染病研究所で細菌学の研究にげみ、二十五才のときフレキシナー博士をたより、渡米した。そして毒蛇の研究でみとめられ、ロックフエラー医学研究所の正所員に選ばれた。

梅毒の研究や、黄熱病の研究をはじめ、多くの研究を発表し、世界の医学界に、その名を知られるようになった。日本から理学博士と医学博士の二つの称号と、学士院から恩賜賞をさすけられ、一九二四年（大正

十三年）には、日本の学士員会に選ばれた。

世界的学者になった英世は、いくつものかがやかしい研究によって、世界各国の大学から、名誉ある学位をおくられた。

一九二七年（昭和二年）、黄熱病の研究のため、西アフリカのアクラにいったが、かえってこの病気にかかり、一九二八年（昭和三年）、ついに研究のぎせいになつてたおれた。五十三才であつた。

参考図書

高山 毅著 野口英世（金子書房）
奥村鶴吉編 野口英世（岩波書店）
奥村鶴吉著 野口英世（講談社）

写真提供

財団法人 野口記念館

かたわな手

山国の春は、おそくやつてくる。

そこは、湖水のほとりの村だった。こちらの岸からはむこうの岸が、ぼんやりとしか見えないくらい、とてもひろい湖水だ。四方をとりまいていいる山は、冬のあいだまっ白に雪につつまれていた。北にそびえていいる山やまからふきちらしてくる風は、すごく寒かった。

でも、今は四月だ。風はまだつめたいけれど、湖水の東のほうからふいてくるようになった。水のおもてはさざなみをたてて、きらきらひかっている。春がしのびよってきたことを知らせていいるかのようだ。

もうじき、サクラの花もさくだろう。道ばたには、タシポポの黄色い花がさくだろう。田んぼは、いちめんにレンゲの花でおおわれるだろう。村の子どもたちには、今が一ばんたのしいときだ。もう新学期がはじまっていた。みな学年が一つすすんで、なんとなく気持ちがいちきつていた。

（ことしは、うんと勉強するかわりに、うんとあばれてやるぞ。）

がき大将どもはそう思つて、うずうずしていた。

もちろん、勉強しようなんてことは、学校がはじまつた日だけのことだ。よく日になると、もうけろりとわすれていた。そして頭の中は、わんぱくな計画でいっぱいだった。

この湖水のほとりの村の名は、翁島村。湖水は、猪苗代湖。それは、福島県の磐梯山のふもとに、大きくひろがっている美しい湖水。

けれども、この村の人びとのくらしは、ゆたかではなかった。わずかな田をたがやして、やつとくらしている人びとも、すくなくはなかった。

それは、今から八十年ちかく前のことだった。今はこの湖水のほとりの道を、しきりに遊覧バスがはしつていて、大ぜいの遊覧客を、翁島へもはこんでくる。けれども、そのころは、街道のところどころに家が集まっていた、さびしい村だった。

子どもたちはつるつるてんの着物をきせられ、ひざつ

こぞうを、むきだしにして、学校へかよっていた。はかまをはいている子は、かぞえるくらいしかなかった。つるつるてんの着物には、いくつも、つぎがあたつてある。

「こんど、この着物をやぶったら、もうつくろいができないって、うちのおっかあがいったぞ。」

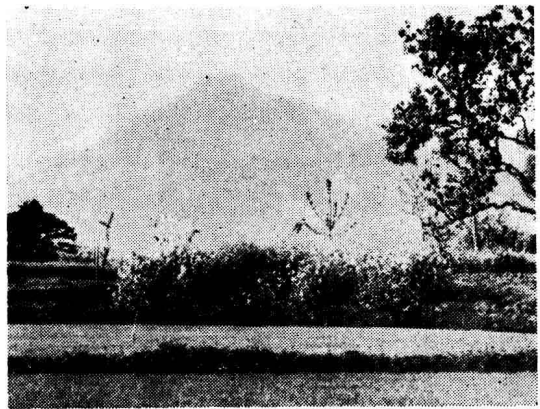
わんぱくこぞうどもは、着物がやぶれていないと、いくじなしのしょうこだと思ひこんでいる。くらしの苦しい山国の村では、人びとの気もあらっぽい。がまん強いが、負けぬ気も強い。子どもたちも、そうだった。

きょうも、その子どもたちが十八人ばかり、がやがやしやべりたてながら、田んぼのあぜ道をつたっていた。すつとんきような声をはりあげたり、げらげら笑ったりして、とてもゆかいなことがあったみたいだ。

もうお昼すぎだった。学校帰りのこぞうたちだ。

「おらあ、あいつのくやしそうな顔を見て、むねがすうつとした。」

「今にも、なきそうだったぜ。まるで目と鼻と口が、一つにくっつきそうになってたな……。こんなふうに。」



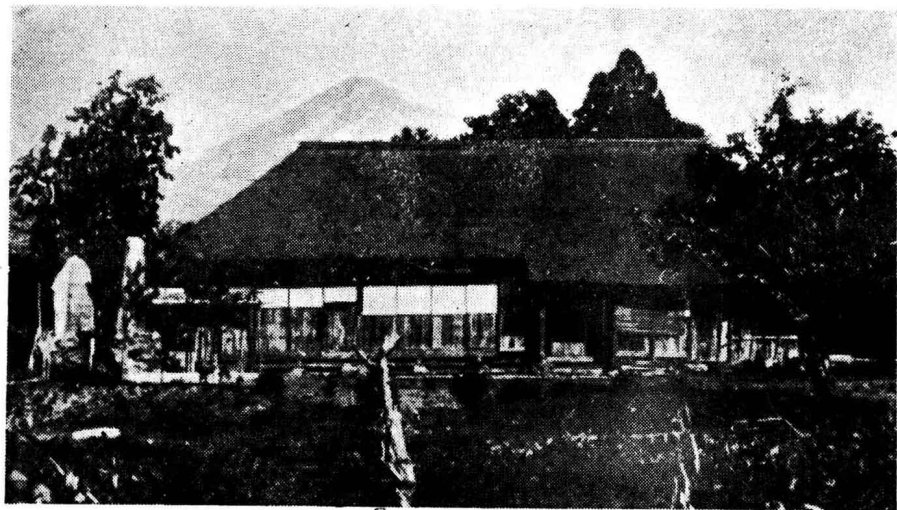
ばんだいさん
磐梯山「あの山のように、どっしりした人間になるんだ。」英世が子ども時代、朝夕あおいだ磐梯山。母シカが毎夜こしまでつかって魚をとったという猪苗代湖はその南にある。

「それから、左の手を後ろへかくして、もじもじしてたじやないか。」

「いくらかくしたって、へんてこな手だつてことがわかつてらあ。」

「でも、あいつは、なかなかったなあ。いじっぱりだなあ。」

「あしたは、ほんとうになかせてやろうよ。あの手をからかってやればいいんだ。そしたら、わあっとなきだす



ひでよ 英世の生家 福島県耶麻郡の猪苗代湖畔にある。左はしは誕生地の碑。その下に、英世の遺髪と、銅版にきざまれた略歴がうめてある。

にきまつてる。」

「わあつ、ゆかいだぞ。それがいい。」

「あした、学校から帰るとき、テンテンテンボウのなきむしやあいって、みんなではやしたててやろうよ。」

「そうだ、そうだ。テンテンテンボウの、なきむしやあい……。」

どうやらわんぱくこぞうどもは、ひとりの子どもが気に入くわなくて、いじめようとしているらしい。

午後の風が、そよそよとふいている。

さもおもしろそうに、みんなは声をはりあげた。

「テンテンテンボウのなきむしやあい。」

そして、すこし長くなった影ぼうしを引きながら、街道のほうへかけたした。

この街道は湖水の北の岸ぞいに、東西にのびている。道が岸すれすれになった所に、二十けんばかり、ひはだぶきの家がならんでいる。大きな家は一けんもない。屋根の上に石をならべた家もある。そこは、翁島の三ツ和という部落。湖水のこのあたりは、三城潟といわれている。

わんぱくこぞうたちの声が遠ざかっていったとき、学校から三城潟への道を、しょんぼりと帰ってくる男の子があった。こぞうたちとおなじ十二、三ぐらいの年ごろだ。もんぺみたいなのはかまをはいてはいるけれど、すねから下はむきだしで、足にはちびけたわらぞうりをはいている。

その子があるいてくる後ろには、磐梯山が美しくそびえたっている。三角にとんがったいただけは、きょうはとくに美しい。が、その子は、ふりむいて見ようともしない。うつむいて歩きながら、ときどき片方の手のさきを見て、あわててはかまの下へひっこめる。左の手だ。この子の一番いやなことが、その左の手にあるらしい。

「テンテンテンボウ……」

こぞうたちの声が、またどこからか、かすかにきこえてくる。そのたびに、この子は顔をあげて、くやしそうに遠くをながめる。くやしにくくく、今にもなみだがふきだしそうな目つきだ。

テンボウというのは、この子のあだ名だ。それは「手んぼう」といういみだ。この子の左の手がひどいかたわ

なのだ。指が五本ともくつつきあって、ぼうみたいになつてゐる。それで、まだ小さかったとき、こんなあだ名をつけられてしまった。この手のことをいわれるのが、この子は一番つらいのだ。悲しいのだ。くやしいのだ。

この子の名まえは、野口清作という。

学校へかようようになってからは、だれも、めつたにテンボウなんていわなくなった。でも、それは、この子をばかにしなくなったからではない。この子の手を気持ちわるがって、いっしょに遊ぼうとはしなかった。そして、この子をいじめるとき、わざと小さいときのあだ名をもちだして、からかうのだった。

清作は、いつものけものにされていた。悪いことには清作の家はひどいびんぼうだ。そのうえ、おとうさんが大酒のみで、ろくろく働かないので、いつもくらしにこまっている。だから、よけいにばかにされるのだ。

(この手がふつうだったなら……)

毎朝、目をさますと第一に、清作はそう思う。このことが、一日じゅう頭からはなれたことがない。手のことを思うと、しやくにさわる。心がまっくらになる。